

## 留学生のための物語日本史

### 第 18 話 伊藤博文

「欧米列強には憲法というものがある。そしてそれを作らなければ、わが大日本帝国は欧米列強の波に飲み込まれてしまう」

神奈川県夏島<sup>1</sup>。現在、横須賀市郊外に当たる場所の料亭の一部屋である。料亭といっても、東京などにある料亭とは異なり、田舎の広めの座敷がある料理屋にちょっと気の利いた仲居が食事を運んでくる店という印象である。それでも横須賀は、首都東京防衛の海軍の練習所があったために、田舎町といってもかなり栄えていて、そこそこ質の良い料理と女性が準備されていた。

「しかし、こんな店にいながら芸者がいないというのも、なんだか寂しいなあ」

一番上座、花鳥風月をあしらった屏風の前に、着流しの和服を少々はだけさせながら胡坐をかいている男、これが伊藤博文である。ほかの人がかなり真剣に語っている時に、なぜか突然、芸者の話をしている。

「伊藤さん、あんたは国家の中枢である総理大臣なんだから、いい加減、芸者などというのはやめたらいかがでしょうかねえ」

ここで、最も伊藤と対立をしているのが井上毅（いのうえこわし）であった。後は、金子堅太郎（かねこけんたろう）と伊東巳代治（いとうみよじ）。二人は、伊藤と井上の言い争いをずっと聞きながら、膳の上を突きつつ、手酌で酒を飲んでいた。

---

<sup>1</sup> 夏島…明治時代前期には陸軍が横須賀港に隣接する夏島を買収した。ここには伊藤博文の別荘が建てられ、1887年に大日本帝国憲法の草稿（夏島憲法）が作られた。現在は記念碑がある。

「それでも、ここは食事の場所だから、仕事の場ではない。まあよいではないか」

「伊藤さん、しかし、陛下からもあなたの女好きには苦言を呈されるほどで、女を使い捨てにしてすぐに捨ててしまうから、あなたのことを『箒』とあだ名されているのは知らんのか」

「いや、まあ、しかし、その土地を知るためには、やはり外に出ない女の視点が一番だろう。それもその土地土地の一流の芸者は、地元の有力者が後ろ盾にいる。そういう人間と揉め事を起こさないようにするには、一流ではない芸者を指名する必要があるのだ。そしてその女の話をよく聞けば世の中がよく見えてくる。岩倉さんと一緒に欧米を回った時、津田梅子（つだうめこ）さんと船の中で一緒になったが、女性といえども人間、その視点は重要である。今回の憲法の起草に関しても、女性の視点を入れるべきで……」

「理屈はよい。そんなものは憲法起草が終わってから、ゆっくり話を聞かせればよいではないか」

金子堅太郎が、あまりのばかばかしさに口を挟んだ。ちなみに伊藤は、女性教育に関して明治政府内では推進派の大物でもあり、明治19年には自らが創立委員長となり「女子教育奨励会創立委員会」を創設している。

「さて憲法であるが、陛下の思召もあるので作らぬわけにはいかない。また欧米列強もすべて作っているから、その欧米に負けぬためにも作らなければならない。清国または朝鮮などは、そのような基礎となる法律がないこと、皇帝の身勝手な思い付きで国が左右されることによって、国が傾いている。そうならないように、どのような国なのか、その基準を作っておくことは必要である」

伊藤博文は、そのように言って、場を仕切り直した。芸者が来ないならば仕方がない。

「では、憲法によって天皇陛下が縛られるということですか」

伊東巳代治が伊藤博文に当然の疑問を言った。

「ヨーロッパでは、議会を作り、その上に国王が存在する。しかし、平時は国王といえども議会に従う。これが普通の政治である」

伊藤博文は明治14年に議会設立の建白書を政府として受け取り、そのうえで、天皇陛下の命を受けてヨーロッパに憲法の視察に行ってきた。井上も同行しており、その二人が中心になっての憲法の起草だ。

「では議会という平民の意志に、天皇が従うことになります」

「そうなる」

「伊藤さん、あなたは間違えている。プロイセン憲法では議会は単なる諮問機関になっており、議会の決定が気に食わないときは、国王は拒否できるようになっている」

「井上さん、それはプロイセンでしょう。イギリスではそうはなっていない。また、アメリカのように、すでに王がない国も少なくないのだ。現在の民権運動の流れなどを見ても、ある程度、議会に力を持たさねばならない」

「では、伊藤さん。議会が天皇陛下を罰することはできるのか。議会は日本国を滅ぼす決定をした場合に、それを拒否することができるのか」

金子堅太郎が議会と憲法と天皇の関係の、最も根本的な問題を言った。しかし、これに応えられる人は、少なくともこのメンバーの中にはいない。四人とも押し黙ったままであった。

「パンパン」

伊藤博文は、皆がうつむいて手酌で飲んでいるその雰囲気は堪えられなかった。急に顔を上げると、笑顔で手を二回叩いた。

「はい。テーショウさん」

テーショウさんとは、この横須賀から大磯、つまり、政府の要人の多くが別荘を構えているこの地域において伊藤博文が地元の人々から呼ばれている愛称であった。元々は「大将さん」であったのが、漁村の訛りでテーショウさんと言われるようになっていた。この地区では、山県有朋は常に護衛を数名連れていたし、陸奥宗光は、一人で歩いていても仕込み杖<sup>2</sup>に拳銃をいつも懐にしまっていた。そのため、山県や陸奥に近寄って気軽に話す農民や漁民はいなかった。

---

<sup>2</sup> 仕込み杖…護身用具として、杖の中に刀や槍の刃を仕込んだもの。

しかし、伊藤はいつも着流しで護衛も連れず、それどころか武器も持たない丸腰、場合によっては着物の裾を尻にからげて<sup>3</sup>、とても内閣総理大臣になるような人物とは思えない庶民的な出で立ちで、一人で歩いていた。農民などにも気軽に声をかけて、地元住民には愛されていたのだ。ほかにも大將はたくさんいたが、伊藤だけが「テーショウさん」と呼ばれるゆえんである。

「伊藤、おまえ」

座敷の中には、芸者が入ってきた。彼の考える通りに二流三流の芸者なのか、あまり美人ではない。しかし、それ以上に井上毅は、先ほどの会話から今日は芸者などは呼ばないと思っていただけに怒り心頭である。

「井上さん、まあ、いいじゃないですか。ちょうどみんな押し黙って会議になっていなかったのですから」

堅物の金子堅太郎が、井上を収めた。誰も金子の疑問に何も言えなかった。そのことを打ち破るには、やはりこれが一番なのである。誰もがそのことは心の中でわかっていた。

「井上さん。昔、私がまだ俊輔と名乗っていたころ、幕府の長州征伐の前後だったと思う。京都の伏見の料亭で、高杉晋作さんが坂本龍馬さんと会ってな、坂本さんの船中八策というやつを見たんだ」

「それでどうなりました」

井上は厳しい目で伊藤を睨んでいるだけであった。伊藤は、自分の両側に芸者を侍らせ、左手は芸者の方に回しているような状態。そんな格好で憲法を論じてほしくない。井上の目はそのように語っていた。しかし、伊藤巳代治や金子堅太郎は、そのような「酔いどれ伊藤」の方が、本音、なおかつ良い案が伊藤から出ることを知っていた。それだけに、その続きがどうしても聞きたい。どうなりました、と声をかけたのは金子であった。

「広く議を開き、とあったかな。細かいところは忘れた。高杉さんは、いまの私と同じように、いや、違ったな、芸者の膝枕をしていたかもしれない、こんな風に」

---

<sup>3</sup> 絡げる…着物の裾を帯に挟むこと。また、その裾。

伊藤は、その場で横になると、横の芸者の膝に頭を乗せた。至極心地よさそうである。

「坂本、これは国民がバカになったら国が亡ぶっていう政策か。国民が馬鹿でも国が亡ばない政策はないのか、と怒鳴りつけたんだ。いや、議会というのはそういうものなのかもしれない。さっきの金子さんの質問でそう思ったよ」

「伊藤さん」

金子は、最も聞きたかった答えを、伊藤が酒の勢いで言ったことがわかった。

「じゃあ、どうするんだ」

井上は、まだ警戒したままの目で伊藤に食って掛かった。まさに、酒の勢いでより攻撃的になっている。井上は井上で、やはり自分の経験と知識で腹案がある。伊藤とは方向性が少し違ったのかもしれない。

「じゃあ、逆に、天皇陛下それも今陛下は心配ないが将来の天皇陛下が日本国はいらないと言ったらどうする。議会と同じことになろう。憲法はあらゆることを想定せねばなるまい。議会が陛下を、陛下が議회를、しっかりと双方が影響し合うようにしなければならないのではないか。どうだろう」

「伊藤さん、その通りかもしれない。できれば、議会は二つあって、専門家と一般の両方があればよい。」

「まず一つは貴族の集まり、これは何らかの功績があったか、平安の昔からの政治の専門家だ。伝統や国の形を考えて物事を判断しよう。もう一つは民衆の集まり。これは今の世の中の要求をするということになろう。その二つが別々に議会を開いて、双方を干渉するというような考え方が良いのかもしれない。井上さんどうだろう」

「ふむ。伊藤さん、いつも意見が合わないと思っていたが、その意見には賛成だ」

井上もやっと表情を崩した。井上はお猪口を右手で取ると、いきなりグッと飲み干し、隣に座る芸者に無言で突き出した。今まで不愛想で怒った表情の井上に少し恐怖を感じていた芸者は、突き出されたお猪口に恐る恐るお酒を注ぐ。井上は、それを見て、今までに見せたことの

ないような笑顔を、伊藤の代わりに芸者に向けた。

「私がベルリン大学のルドルフ・フォン・グナイスト、ウィーン大学のロレンツ・フォン・シュタインの両学者から教えてもらったのは、憲法は日本の歴史や伝統や文化に立脚したものでなければならないということだ。井上さんは、欧米列強に追い付くことばかりに気を取られている。もちろん、日本国にとってそのことは非常に重要だ。しかし、そのことによって日本国の歴史や文化や伝統を忘れてはならないのではないかと思う。高杉さんも、吉田松陰先生もそのことが最も重要と思っていたのではないかな。私たちは、もっと外国ではなく、この国の文化を学ばなければならないのではないか。」

井上だけでなく、そこにいる皆が深く頷いた。少し感動したのか、また押し黙ってしまった。伊藤は、このように押し黙った暗い雰囲気が何よりも嫌いだ。

「だから、まずは芸者遊びという日本古来の文化を……」

「伊藤さん、それは違うのじゃないかな」

金子もそう言いながら芸者に酒を注がせた。伊藤がいると、憲法を議論するような真剣な場所であっても笑いが自然とこぼれ、そして緊張が解けた状態で最もよい案が浮かぶのである。

このようにして、この四人によって伊藤の夏島の別荘で「大日本帝国憲法」が起草された。この憲法案は、まず伊藤によって内閣に持ち帰られ、様々な人に見せた。伊藤は、この時、担当官に対し、「新憲法を制定するに、伊藤は一法律学者であり、汝らもまた一法律学者である。それ故、我が考えが非也と思わば、どこまでも非也として意見せよ。意見を争わせることが、すなわち新憲法を完全ならしめるものである」と訓示している。

この憲法の制定に関して、谷干城（たにたてき）は「伊藤公は憲法制定の大功臣である。初め自由党のごときは乱暴にも主権在民的憲法論を振り回して急いで憲政を敷くことを企図したものであるが、公はこの怒涛澎湃<sup>4</sup>（どとうほうはい）の中を漕ぎ抜けて万事遺漏なき準備の後、明治 22 年に至って公の起草した憲法を發布し、欧州の憲法史に見られるような凄惨な流血の

---

<sup>4</sup> 澎湃…水がみなぎり逆巻くさま。

歴史を繰り返すことなく、平和円満のうちに我が国民を憲政の恩恵に浴せしめた。当時もし自由党のいう通りに行って、明治8年、9年ないし明治14年、15年の段階で憲法を發布したらどうだろう。我が国民はいまだ憲法が何であるか理解できる状況にないゆえに、その議会政治ももっぱらケンケンガクガク（原文ママ）とした政客の論争で終わり、真の憲政の運用は到底実現することはなかったであろう。この点においても伊藤公は特に偉いと言わねばならない。」とこれ以上ない評価をしている。一方、福澤諭吉は主宰する『時事新報』の紙上で、「国乱」によらない憲法の發布と国会開設を驚き、好意を持って受け止めつつ、「そもそも西洋諸国に行われる国会の起源またはその沿革を尋ねるに、政府と人民相對し、人民の知力ようやく増進して君上の圧制を厭い、またこれに抵抗すべき実力を生じ、いやしくも政府をして民心を得ざる限りは内治外交ともに意のごとくならざるより、やむを得ずして次第次第に政權を分与したることなれども、今の日本にはかかる人民あることなし」として、人民の精神の自立を伴わない憲法發布や政治参加に不安を抱いている。

伊藤は、憲法發布の時には枢密院の議長になり、明治天皇の最も信認の厚い政治家として、様々な方面で活躍をした。そして、東アジアの諸問題を解決するために訪れた満州ハルピンにて、朝鮮人暴漢、安重根によって暗殺されてしまう。

この伊藤の暗殺に関して、長年日本に滞在したドイツ人医師、エルヴィン・フォン・ベルツは、「韓国人が公を暗殺したことは、特に悲しむべきことである。何故かといえば、公は韓国人の最も良き友であった。日露戦争後、日本が強硬の態度を以って韓国に臨むや、意外の反抗にあった。陰謀や日本居留民の殺傷が相次いで起こった。その時、武断派および東京の言論機関は、高圧手段に訴うべしと絶叫したが、公一人、穏和方針を固持して動かなかった。当時、韓国の政治は徹頭徹尾腐敗していた。公は時宜に適し、かつ正しい改革によって、韓国人をして日本統治下に在ることがかえって幸福であることを悟らせようとし、六十歳を超えた高齢で統監という多難の職を引き受けたのである。欧州においては韓国保護について新統治の峻厳を批判する者は多い。これらの批評者は日本当局が学校を創設し、農業を改善し、鉄道を敷設し、

道路を開設し、船舶や港湾を建造し、かつ日本人移民によって勤勉な農夫、熟練工たる模範を韓国民に示そうという苦心経営の事実をことごとく無視する者である。私は三度現地に赴き、実際の状況を目撃して感服した。(略) 東京で公より話を聞いた時も、公が韓国とその人民の幸福を推進するためにいかに尊敬すべき企画を持ち、いかに多大な功績をあげたかを明白に推知しえた」と評している。



## 19 東郷平八郎

「報告します。信濃丸から打電」

鬱陵島<sup>5</sup>にあった戦艦三笠の艦橋<sup>6</sup>に緊張が走る。連合艦隊参謀長の加藤友三郎（かとうともさぶろう）は、すぐにその言葉に反応した。艦橋の椅子に深く腰掛けて少々居眠りをしていたが、すぐに背筋を伸ばしたのである。

「打電、『敵艦隊ラシキ煤煙見ユ』繰り返します、『敵艦隊ラシキ煤煙見ユ』です」

「すぐに秋山を起こせ」

加藤友三郎は、近くにいる者に指示を出した。後に首相にもなる加藤は、海軍の軍人である。これらの情勢に対して反応は早い。

「おはようございます」

秋山真之（あきやまさねゆき）先任参謀は、今、この日本艦隊が待ち構え、そして、日露戦争の命運を左右するロシアのバルチック艦隊を迎え撃つ作戦をすべて考えた参謀である。連合艦隊司令長官東郷平八郎をして「智謀泉のごとし」と言わしめたほどの人物であるが、しかし、服装などは全く無頓着であった。この時も、シャツは出ているし、上着もそのまま、眠い目をこすりながらの艦橋入りである。

「信濃丸から打電だ」

「そろそろでしょう。そんな時期です」

「司令長官を起こすか」

まだ早朝である。参謀二人はそのように話していると、服装もしっかりとした東郷平八郎がその場に現れた。

「起こす必要はない。もうここにいる」

---

<sup>5</sup> 鬱陵島…大韓民国慶尚北道鬱陵郡に属する、日本海に浮かぶ直径 10km 程度の火山島。朝鮮半島から約 130km 沖合に位置する。

<sup>6</sup> 艦橋…軍艦の甲板上など、高所に設けられた指揮所。

絶妙なタイミングで入ってきた東郷司令長官に加藤と秋山はその場で敬礼した。

「何をしておる。すぐに出港準備を下命せよ」

「はい」

鬱陵島全体にサイレンが鳴り響いた。それに呼応し、すべての軍監が汽笛を鳴らす。いよいよ出港である。

「どちらに向けて行きますか」

「信濃丸と言ったな。成川大佐だ。彼は確実に確認したのちに報告をしてくる。信濃丸ならば対馬水道のあたりであるから、そちらに向かう準備をしたまえ」

東郷は、そのように言うと艦橋で仁王立ちになった。

「報告します。信濃丸から打電。『夕』連送、地点203です」

暗号で、いくつかはカタカナ一文字を連送することによって決められていた。『夕』は『敵ノ第二艦隊見ユ』の意味だ。

「準備できしだい出港、鬱陵島沖集合地点にて全艦隊集結まで待機、そのままバルチック艦隊撃滅に向けて進む。秋山、大本営に打電、『敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス』」

「はい」

明治38年5月27日、早朝6時21分、日本のほぼすべての軍艦を集結し、世界最強と言われたバルチック艦隊に向けて海軍連合艦隊は出港した。この間、信濃丸は、バルチック艦隊と並走し、逐次その位置と船の数を戦艦三笠に向けて打電している。なお、大本営に向けて打電は『敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス』の後に『本日天気晴朗ナレドモ浪高シ』と秋山が付け加えている。

その日13時ごろから連合艦隊第三艦体が付かず離れずバルチック艦隊と並走し、そして主力である第一艦隊・第二艦隊と13時39分に合流する。日本海にバルチック艦隊と日本の連合艦隊が遭遇したのである。東郷平八郎は艦橋の中ではなく、その屋上に立っていた。

「あれがバルチック艦隊か」

「司令長官、危険ですから艦橋内にお入りください」

若い士官が東郷の身を案じて声をかけた。大砲や弾丸の飛び交うなか、外にいるよりも室内の方が安全に決まっている。

「危険と思うならば、君たちのような若い者が入るがよい。私のような年寄りも、将来の日本を担う者ではないから、危険など関係がない。それよりも、ここにおいて秋山君の考えた作戦がその通りになるかを見ていたほうが良いのだ」

若い士官は、顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。身を案じて言ったつもりが、かえって自分が心配されてしまったのである。

「君、そんなに落ち込むな。山本権兵衛（やまもとごんのひょうえ）大臣は、天皇陛下に東郷司令長官に関して『運が良い男ですから』と言ったそうだ。艦橋にいるよりも司令長官の近くの方が安全かもしれないよ」

秋山真之は、落ち込んでいる若い士官に声をかけた。決戦直前、それも、目の前に世界最強とうたわれたバルチック艦隊を目の前にしながら、このような冗談を言えるような雰囲気であった。

「Z旗を揚げよ」

東郷司令長官は望遠鏡で敵艦影を見ながらつぶやいた。すぐに加藤友三郎参謀長が繰り返す。マストに「Z」を示す旗がはためく。「Z」とは後ろがないという意味である。この時はそれが暗号になっており、そしてその旗に合わせて命令書の封を切ることになっていた。各艦の命令書には同じようにこう書かれていた。

『皇国ノ興廢、コノ一戦ニ在リ。各員一層奮勵努力セヨ』

バルチック艦隊は二列で、日本軍は単縦陣といわれるすべての艦が一行になつて近づいて行く。当然に徐々に距離が近づくのだ。すでにバルチック艦隊からの大砲は何発も放たれ、東郷平八郎の周辺にも水しぶきがかかるほどであった。何発か敵弾が当たってしまった艦もあった。

しかし、日本の軍艦は全く弾を撃たない。いや東郷平八郎は攻撃命令を出さないのである。

「撃たないのですか」

若い清河純一参謀は東郷平八郎の顔を見た。東郷はその言葉が聞こえていないのか、何も言わずにじっとバルチック艦隊を睨んでいるままだ。そのような東郷は普段の温和で無口な東郷ではなく、寺の門を守る仁王像に近いものであった。

「距離8000」

もう一人の参謀飯田久恒が測量用の望遠鏡を見ながら大声を上げた。大声を上げなければ聞こえないほど、砲弾の音と爆音が激しくなっていた。今まで何があっても動かなかった東郷は、その声とともに首から下げた双眼鏡を覗くと、手を放し、そして右手を挙げて大きく空中に円を書いた。

「左舷、取舵<sup>7</sup>一杯」

加藤友三郎参謀は大きく声を上げた。先頭を走る旗艦、戦艦三笠に敵の弾が集中する。後日判明することであるが、戦艦三笠に的中した敵砲弾48発のうち、40発はすべて右舷側に集中していた。この左取舵の間に敵の砲弾が集中していたことを意味する。

「耐えろ」

東郷は全く姿勢を崩さず戦艦三笠の上に立ち続けた。三笠は風上に立ち、そして約2分間敵の砲弾を集中して受けたのである。その間、他の軍艦が徐々にターンする。東郷はすべての艦の癖や艦長の性格を知り尽くしており、戦艦三笠が敵の標的となっている間に、他の艦が全部ターンすることがわかっていたのである。

「取舵、完了」

「全砲門開け。攻撃開始」

世にいう「トーゴー・ターン」といわれるものである。この日本海海戦までは双方が一列に並び、すれ違うように大砲を撃っていた。しかし、船は前方よりも横向きになったほうが大砲

---

<sup>7</sup> 取舵（とりかじ）…船舶の航行において、進行方向左に舵を転ずること。

の数が多い。東郷平八郎、いや、秋山参謀はその「砲門の数」を考え、敵の前で船を横向きにしたのだ。「丁字戦法」というように、敵が一行で来る前に、丁の字の上の線のように、多くの艦で敵の艦を集中砲火で沈める。それを敵の目の前で大回頭することによって、「丁の字」を作ったのだ。回頭している間は集中砲火されるが、しかし、回頭し終われば圧倒的な数の砲門がバルチック艦隊に火を放ったのである。

「無事に耐えましたね」

秋山参謀は東郷司令長官に言った。

「あんなに遠くからあれだけ大砲を撃っていれば、敵の大砲の弾筋も見える。そんなにたくさんさんの弾が当たるとは考えられんだろう」

「しかし、自らが犠牲になって丁字戦法を完成させるとは」

「最新鋭で最も装甲の厚い三笠に被弾を集中させ、他艦に被害が及ばないことを狙っただけだ。万一三笠が大破し、私が戦死してでも丁字の状態を完成させることで敵に勝てるだろう。私が勝つのではなく日本が勝つのだ」

東郷はそう言って、再び双眼鏡を目にした。バルチック艦隊の先頭の第一戦艦隊旗艦「クニヤージ・スヴォーロフ」と第二戦艦隊旗艦「オスリャービヤ」は、回頭直後の砲撃により完全に沈黙していた。ほとんどの敵艦は、沈むのではなく、日本の新兵器の砲弾により艦の上で火災が発生し、戦闘能力を失っていたのである。

戦闘はそのまま夜間まで続いた。夜間は、水雷船と駆逐艦が縦横無尽に走り、そして、魚雷によって敵艦を攻撃した。秋山参謀は、もともとバルチック艦隊を撃つために「七段階の作戦」という作戦を立てた。

〈第一段〉主力決戦前夜、駆逐艦・水雷艇隊の全力で、敵主力部隊を奇襲雷撃

〈第二段〉艦隊の全力を挙げて、敵主力部隊を砲雷撃により決戦。丁字戦法が行われた。

〈第三・四段〉昼間決戦のあった夜、再び駆逐隊・水雷艇隊の全力で、敵艦隊を奇襲雷撃。

高速近距離射法が行われた。

〈第五・六段〉夜明け後、艦隊の主力を中心とする兵力で、徹底的に追撃し、砲雷撃により撃滅

〈第七段〉第六段までに残った敵艦を、事前に敷設したウラジオストック港の機雷原に追い込んで撃滅

実質的には、このなかの第一段は実現不能であった。結局、第二段と第三段でバルチック艦隊のほとんどは撃滅された。よく5月28日、バルチック艦隊、第三戦艦隊のネボガトフ少将は降伏し、そして日本海海戦は終わったのである。無事にウラジオストックにたどり着いたのは、1隻だけであった。

敵がすべていなくなったのち、東郷平八郎は、全艦に敵兵の救助を命じている。

その後、怪我をしたロシア提督の見舞いにまで訪れているのだ。

「戦争が終われば、人を助けるのが武士の道である」

この言葉は、世界の称賛を浴びた。

翌年、日露戦争終結後、この連合艦隊の解散式が佐世保で行われた。この時の言葉は、参謀秋山真之が起草し、東郷平八郎が手を加えたものといわれている。そしてその文章が素晴らしく、アイゼンハワーはその言葉をすべて自ら翻訳し、アメリカ軍の教科書の最終ページに記載されているのである。

〈東郷司令長官による連合艦隊解散式における訓示〉

二十数ヶ月にわたった戦争も、今や過去のこととなり、わが連合艦隊は、今やその任務を果して、ここに解散することとなった。しかし艦隊は解散しても、わが海軍軍人の務めや責任が、軽減するということはない。この戦役で収めた成果を永遠に保ち、さらに一層国運を盛んにするには、平時・戦時の別なく、まずもって外からの守りに対し、重要な役割を持つ海軍が、常に万全の海上戦力を保持し、ひとたび事あるときは、ただちに、その危急に対応できる備えが必要である。

ところで、その戦力であるが、戦力なるものはただ艦船兵器等、有形の物や数によってだけ定まるのではなく、これを活用する能力、すなわち無形の実力にも存在する。百発百中の砲は、一門よく百発一中、いうなれば百発打っても一発しか当たらないような砲なら、百門と対抗することができるのであって、この理に気づくなら、われわれ軍人は無形の実力の充実、すなわち訓練に主点を置かなければならない。先般我が海軍が勝利を得たのは、もちろん天皇陛下の靈徳によるとはいえ、一面また将兵の平素の練磨によるものであって、それがあのような事例をもって、将来を推測するならば、たとえ戦争は終わったとはいえ、安閑としてはおれないような気がする。

考えるに軍人の一生は戦いの連続であって、その責務は平時であれ、戦時であれ、その時々によって軽くなったり、重くなったりするものではない。事が起これば、戦力を発揮するし、事が無いときは、戦力の蓄積に努め、ひたすらその本分を尽くすことにある。過去一年半、かの風波と戦い、寒暑に直面し、しばしば強敵とまみえて生死の間に出入りしたことは、もちろん大変なことではあったが、考えてみると、これもまた、長期の一大演習であって、これに参加し、多くの知識を啓発することができたのは、軍人として、この上もない幸せであったと言ふべきで、戦争の苦労も些細なものにしてくれると言えよう。もし軍人が太平に安心して、目前の安楽を追うならば、兵備の外見がいかにも立派であっても、それはあたかも、砂上の楼閣のようなものでしかなく、ひとたび暴風にあえば、たちまち崩壊してしまうであろう。まことに心すべきことである。

昔、神功皇后が三韓を征服されてのち、韓国は四百余年間、わが支配の下にあったけれども、ひとたび海軍が廃れると、たちまちこれを失い、また近世に至っては、徳川幕府が太平になれ、兵備を怠ると、数隻の米艦の扱いにも国中が苦しみ、またロシアの軍艦が千島樺太を狙っても、これに立ち向うことができなかつた。目を転じて西洋史を見ると、19世紀の初期ナイル及びトラファルガー等に勝った英国海軍は、祖国をゆるぎない安泰なものとしたばかりでなく、それ以後、後進が相次いで、よくその武力を維持し、世運の進歩に遅れなかつたから、今日に至る

まで永く国益を守り、国威を伸張することができた。

考えるに、このような古今東西の教訓は、政治のあり方にもよるけれども、そもそもは軍人が平安な時にあっても、戦いを忘れないで、備えを固くしているか、どうかにかかり、それが自然にこのような結果を生んだのである。

われわれ戦後の軍人は、深くこれらの実例、教訓を省察し、これまでの練磨の上に、戦役の体験を加え、さらに将来の進歩を図って、時勢の発展に遅れないように努めなければならない。

そして常に聖諭<sup>8</sup>を泰戴して、ひたすら奮励し、万全の実力を充実して、時節の到来を待つならば、おそらく、永遠に国家を護るという重大な責務を果たすことができるであろう。

神は平素ひたすら鍛錬に努め、戦う前にすでに戦勝を約束された者に、勝利の栄冠を授けるとともに、一勝に満足し、太平に安閑としている者からは、ただちにその栄冠を取上げてしまうであろう。

昔のことわざにも『勝って兜の緒を締めよ』とある。

明治 38 年 12 月 21 日 連合艦隊司令長官 東郷平八郎

---

<sup>8</sup> 聖諭…勅諭のこと。